

学而事人を目指したサービス・ラーニングにおける 授業づくりへの提言

— 学生の学びと受入団体の意見をもとに —

林 加奈子・山口 咲

キーワード：サービス・ラーニング、学而事人、主体的な学び、学生受入団体、貧困

概要

本稿では、2012年度よりサービス・ラーニング科目として設置された基盤教育院フィールドスタディーズの一プログラムである「わたしたちに身近な貧困」を取り上げ、受入団体の声も取り入れながら授業づくりおよび学生の学びの視点から振り返る。

同プログラムでは、大学の授業において、講義を軸にしながらも学生参加型の授業づくりを行ってきた。それは、講義で聞いた知識が現場で実感を伴って理解できるようにすることを目的としていたからであり、学生が自ら考える機会をつくることを意図していたからである。しかしながら、今回受入団体の担当者から意見を得、またこれまでの学生の学びを振り返るなかで、学生には現場での体験を通して自ら発見した疑問に基づき、自主的な学習を進めていく力が弱いこと、また現状の授業づくりがそれを支えられていないこと、そしてフィールドでの活動に際して、団体のメンバーと良い関係性を築いていくことや団体に貢献していこうとする気持ちが学生のなかに期待通りには育っていないことが課題として浮かび上がってきた。そして、これらは活動期間の短さと授業づくりの方法に要因があることが見えてきた。

そこで、本稿では、これらの課題を克服するべく、今後のサービス・ラーニングにおける授業づくりへの提言として、以下三つを挙げる。ひとつは、学生が現場で自ら発見した疑問に基づき、自主的な学習をしていくことができるようにするために、教員は学生が現場で何を感じ、考えているのかを丁寧に把握しながら個別の指導を行っていくことである。そして、ふたつめは団体活動における一人ひとりの責任と役割を考えさせるような学生への積極的な働きかけと大学と受入団体との良好な関係性の構築である。そして最後に、これを達成するためには、学生の現場におけるより長期的な関わりを確保することである。

1. はじめに

本学では、2012年度より正式にサービス・ラーニングが授業に導入された。本学におけるサービス・ラーニングは、建学の精神、そして本学の教育方針である「学而事人(学びて人に仕える)」を具現化する取り組みそのものであり、本学で学ぶ学生一人ひとりがキリスト教精神を備えた国際人として育てていくための礎を担う「人間教育」と位置づけることができる。

基盤教育院フィールドスタディーズの科目は、座学のみでなく、学生が学外で行う活動や体験を重視した内容となっており、海外および国内にフィールドを有している。国内をフィールドとした科目は「地域社会参加」と呼ばれ、2012年度より正式にサービス・ラーニング科目となっている。現在「地域社会参加」の下には各学期8つのプログラムが設置されているが、本稿ではそのなかの一つである「わたしたちに身近な貧困」を取り上げ、2012年度の開始から1年半を経過した同プログラムについて、受入団体の声も取り入れながら授業づくりおよび学生の学びの視点から振り返る。そして、ここから現状の課題を抽出し、今後のサービス・ラーニングの授業づくりに提言を行う。

なお、4. (3)は、学生受入団体の担当者であり、本学卒業生の山口咲さんが、それ以外は林が執筆している。

2. サービス・ラーニングとは

サービス・ラーニングはアメリカで生まれた学習方法である。同国において1990年に制定された国家およびコミュニティのサービスに関する法律(National and Community Service Act¹)には、サービス・ラーニングは「ある特定のコミュニティにおいて実施され、そのコミュニティのニーズを満たす」ものであり、学生の「市民としての責任を育成する」ものであることが書かれている。また、「学生は適切に組み立てられたサービス活動に積極的に参加することを通して学び、成長する」こと、サービス・ラーニングは「アカデミック・カリキュラムあるいはコミュニティ・サービス・プログラムの教育的な要素に統合されたもの、あるいはそれを高める」ものであり、「学生がサービス活動を振り返る時間を教育プログラムとして確保していること」が必要だとされている。この定義からは、サービス・ラーニングは「コミュニティにおける活動」と「アカデミックな教育活動」を二つの大きな柱として成り立っていることが分かる。

しかし、ここで注意しなくてはならないことは、サービス・ラーニングは単なるボラン

ティア活動やこれまで大学等で実施されてきた実習、インターンシップ、フィールドワークとは異なるということである(桜井 2007)。一般的に、ボランティア活動ではコミュニティがその活動の恩恵を受け²、実習やインターンシップでは、学生が学ぶことが目的化されているため、学生が恩恵を受けることとなっている。しかし、サービス・ラーニングでは、コミュニティと学生の双方が恩恵を受ける者として明確に位置付けられている。したがって、サービス・ラーニングにおいては教育目的だけの現場の活用、現場からの収奪は許されない。サービス・ラーニングでは、学生が特定のコミュニティに入り、何らかの活動を通してそこで起きていることについて現場の文脈からさまざまに学ぶわけであるが、それだけではなく、彼らは同時にそのコミュニティの抱える課題を共に解決するために、必要な知識を座学で学術的に学び、学んだ成果をコミュニティの問題解決に活かしていくことが期待されているのである。アメリカでは、学生自身がコミュニティの課題を見つけ、その課題を解決するためのプロジェクトを企画し、実施し、評価するという方法もとられているが、このような教育活動は学生の主体性と教員の高い力量、そしてコミュニティの理解を必要とする極めて高度な教育活動であると言えることができる。

アメリカでこのようなサービス・ラーニングが登場した背景には、参加民主主義の伝統がある。アメリカは、建国時から「自治の精神」を大切にしており、自治の精神を身につけ、自発的あるいは主体的に政治に参加する市民が理想的な市民であると捉えられてきた(唐木 2010)。そのため、この参加民主主義を身につける一つのツールとしてサービス・ラーニングは国策として取り入れられたのである。

教育学的な視点から見れば、アメリカにおけるサービス・ラーニングの取り組みは、1990年以降イギリスをはじめとする各国で取り入れられているシティズンシップ教育の流れに組み入る。シティズンシップ教育とは、端的に言えば望ましい市民性を育てる教育ということであるが、世界的にこのような教育への関心が広まった背景には、国民国家が転換期を迎えていることがある。従来国民国家では、国籍を有していることが市民権行使の要件であった。しかし、国境を越えた人口移動の増加により、居住に基づく市民権の行使や国境を超えたコミュニティが想定され始めている(嶺井 2007)。特に、ヨーロッパでは移民の増加により、多様な文化を抱える人々がいかに共にくらししていくかが大きな課題となっている。また、社会の多様化・複雑化に伴う共同体意識・公共性の崩壊、若者の政治離れも社会的な課題として浮かび上がっている。このようななか、シティズンシップ教育は社会的な課題を解決していく一つの方策として位置づけられているのである。

このような状況は日本においても例外ではなく、中央教育審議会は2007年「学士課程教育の再構築に向けて」の報告のなかで、また2012年答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」のなかで、これからの時代に対応できる学生を育成するべく、

体験的な学習方法や学生参加型のアクティブラーニングを用いて学生の主体的な学びや能動的学修を引き出すこと、課題探究能力を重視することを提言している。

3. 桜美林大学におけるサービス・ラーニング

本学におけるサービス・ラーニングは、建学の精神を受け継ぎ、これまでキリスト教センターの課外活動として実践が積み重ねられてきた(土橋 2011)。そして、2011年4月に基盤教育院の下にサービス・ラーニング・センター(以下、SLC)が設置されてからは、2012年度より正式に授業科目として展開されている³。2011年度、本学におけるサービス・ラーニングの取り組みについて検討を重ねてきたSLC企画委員会では、本学におけるサービス・ラーニングの目的を以下のように述べる⁴。

桜美林大学におけるサービス・ラーニングの目的は、…(本学の)ミッションに述べられている「学而事人—学びて人に仕える」の精神を社会貢献活動(社会サービス活動)の中で体験学習し、その精神を態度として身につけさせることである。また、…最終的には「大学で学んだこと、身につけた能力を活かして国内外の地域社会に貢献する」ことのできる若者、そして一人のよき地球市民へと育てることである。

以上からは、本学におけるサービス・ラーニングは、「学而事人」を具現化する上で非常に重要な取り組みとして位置づけることができる。

2011年夏には、この目的を満たすようなサービス・ラーニングの内容を検討するべく、サービス・ラーニング・センター長がアメリカを訪れ、大学教育のなかでサービス・ラーニングを実践している三校を訪問し、ヒアリングを行っている。そして、その結果、SLC企画委員会での議論を経て、本学基盤教育院フィールド教育部門におけるサービス・ラーニングの科目は「社会正義」を追求するものとし、15コマの授業(振り返り含む)と20～30時間の学外活動を合わせ、2単位を認定する科目となった。しかし、上記2.で述べたようなアメリカ型のサービス・ラーニング、すなわち学生がコミュニティの課題を見つけ、その課題を解決するためのプロジェクトを企画し、実施し、評価することを十分な準備もなく追求することは困難であることが予想されたため、将来的に中級・上級クラスをつくることとし、学生が主体的にプロジェクト運営をできるようになることを目標に、初年度はまず基盤教育院の科目として初級クラスを開講、現場での学びを教室での学術的な学びと結びつけることが目指された。そして、初年度の2012年度には新規

サービス・ラーニング科目として「わたしたちに身近な貧困」「災害支援とボランティア」「地域に根ざした福祉」「地球にやさしい食と農」の4プログラムが設置された。

以下では、日本の貧困をテーマとする「わたしたちに身近な貧困」を取り上げ、1年半のサービス・ラーニングの取り組みについて振り返る。

4. サービス・ラーニングの授業実践 —「わたしたちに身近な貧困」を例に—

(1) プログラム概要

「わたしたちに身近な貧困」では、日本の貧困をテーマとし、「貧困」を自分事として捉え、その解決のために自ら考え行動できるようになることを学習目標として授業づくりを行ってきた。これまで半期の授業を3回行ってきたが、履修者数は平均10名であった。

学生は週一回の授業(全15コマ)のほかに、山谷・浅草地域で野宿者支援をしている隅田川医療相談会という任意のボランティア団体および同地域で活動する他の団体の活動に、合わせて30時間以上参加することとなっている。学生が参加する活動には、共同炊事(野宿者や生活保護受給者を含む生活困窮者とともにごはんをつくって一緒に食べる活動)、医療相談活動(医師による問診前の当事者への聞き取りや声かけ、散髪)、上野・浅草の夜回り活動がある。学生は、月一回共同炊事と医療相談活動に、また授業期間中に一回、夜回り活動に参加するほか、同会メンバー(医療従事者や社会人)との交流会や学習会に参加している。そして、その日の活動後に毎回「活動記録」を記入し、大学の授業のなかでの振り返りの時間に活用している。なお、隅田川医療相談会を受入団体とするようになった契機は、筆者が個人的にこの団体で以前から活動していたことにあった。

週一回の大学の授業は、大きく分けて講義、意見交換、振り返りの三つに分けられる。講義では、貧困の定義や社会保障制度、野宿者・女性・若者・子どもと貧困等について扱い、毎回授業の後半には講義で聞いたことについての意見交換を行う時間をとっている。また、ワークショップも取り入れ、学生参加型の授業づくりを行っている。現場での活動の振り返りの時間では、「活動記録」をもとに現場でのそれぞれの学びや疑問点を共有すると同時に、自分たちに何ができるのかについて話し合う機会を設けている。そして、学期末にはまとめとして4,000字のエッセイの執筆を課し、フィードバックとして受入団体に完成したエッセイを送り、共有している。サービス・ラーニングとしての本プログラム全体の概念図は以下の通りである。

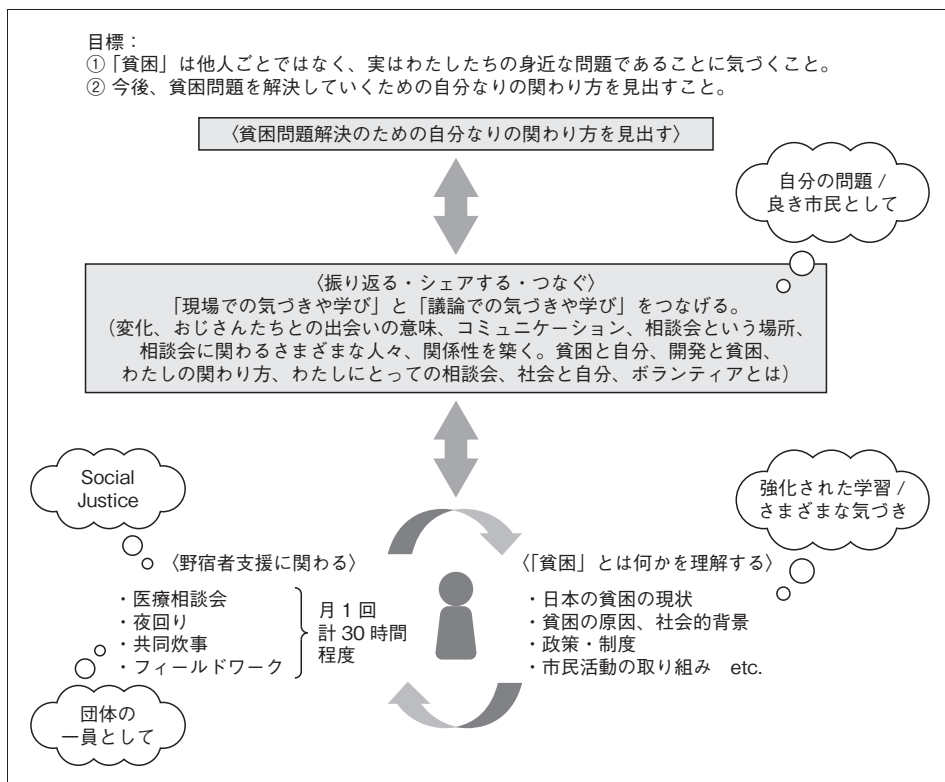


図1 地域社会参加「わたしたちに身近な貧困」概念図

以上のような形での授業づくりは、現場での学びと大学での講義での学びをつなげることを焦点に置いてきたと言える。しかしながら、1年目を終えて、学生は野宿者の現状や日本の貧困、日本社会が抱える社会的な課題について学びを積み重ねてきてはいるものの、一方で、コミュニティに入って他者と関わる・協力する・働きかけるという力が弱いのではないかと感じ始めた。学生は当事者である野宿者や生活保護受給者であるおじさんたちとの関係づくりは非常にうまくやっている。しかしながら、共に活動する医療従事者や社会人ボランティアとの関係づくり、またただ漫然と客として参加するのではなく、その文脈や関係性のなかで自分が責任をとって活動をともに展開していくこと、すなわち団体に貢献するという点については、さほど意識を向けていないように思われた。このような状況は、筆者にこのままでは教育目的による現場の収奪になるのではないかという危惧を芽生えさせ始めた。

そこで、2年目の2013年度からは先の大学での授業内容に加え、組織において一人ひとりが果たすべき責任・役割とリーダーシップ、他者との関係性の構築の重要性についても考える時間を設け、学生一人ひとりが現場でどのように動いていけるのかについても話

し合うこととした。

(2) 学生の学び —学期末のエッセイから—

学期末のエッセイにおいて、学生は自らテーマを決め、構成を考え、サービス・ラーニングでの学びを自由に表現している。レポートではなく、エッセイを課題としている理由は、自己表現力を養ってほしいという思いからである。授業のなかでの学生の意見交換や振り返りの様子を見ていると、現場で感じ、考えたことを自分のことばでうまく伝えられない学生が多いと感じる。サービス・ラーニングがフィールドに出て五感を使って感じる学びも取り入れているのであれば、書籍や他者の意見を流用するのではなく、自らのことばで自らの考えを自由に表現することも学びの一つになると考えている。

これまでの学生のエッセイを見てみると、タイトルには「おじさんと貧困と私」「ホームレスのおじさんと友だちになる」「若者ホームレス」といった当事者との交流から気づいたことを綴ったものや、「私たちの身近な貧困～生活保護制度の見直し～」「シングルマザーと貧困～貧困の世代間連鎖～」など、具体的な事象に焦点を当てているもの、また「これから私にできること～理想の社会とは～」「山谷から問い直す『生』と『社会』」「貧困について考えた～そこから見える社会と自分～」というように、広く社会についてや自分と社会との関係性を見つめ直すものが見られる。これらエッセイからは、学生たちが先進国である日本に貧困が存在することや、一般の人々や行政による差別・排除があること、また自分自身のなかにも野宿者に対し偏見があることに気づき、それを乗り越えようとしてきたことが読み取れる。また、野宿者問題や社会保障制度、社会的排除や社会的孤立の問題について知識を得、現場でのこれまでの活動体験と結び合わせながら、これらの問題の理解を深め、これら問題解決のために自分には何ができるのかについても考察している。2012年度秋学期の履修生の数名は、授業履修前から個人的に医療相談会に関わっていたこともあり、授業の時間外に自分たちのできることについて話し合い、本学の多くの学生に野宿者問題を知ってもらいたいと野宿者問題の展示会を企画し、学内で開催した。

また、(1)で述べたように、2013年度から授業のなかで一人ひとりが果たすべき責任・役割やリーダーシップ等について話し合う時間を設けてからは、「ただ参加するのではなく、目標を持って参加することにした」という意見も見られたが、全体的な傾向としては団体への貢献についての考察や言及は少ないのが現状である。

(3) 受入団体からの提言 —隅田川医療相談会のメンバーとして、卒業生として—

本項は、隅田川医療相談会の受入担当者である山口咲さんに執筆を依頼した。なお、彼女は2012年3月に本学を卒業している。

○はじめに

「桜美林大学 LA 学群、国際協力専攻の山口咲です。」という自己紹介をしていたのがついこないだのように思えます。隅田川医療相談会（以下、相談会）には大学1年の9月からボランティアとして関わっており、現在も仕事の合間を縫いながら中心メンバーとして関わっています。相談会は、毎月第3日曜日に浅草の隅田公園で、野宿者や生活保護受給者、生活困窮者などを対象に、無料の健康相談や生活相談、鍼灸（マッサージなど）、散髪などを行っている任意のボランティア団体です。私が相談会でボランティアを始めた理由は、大学1年の夏に大学主催のフィリピン国際協力研修に参加し、途上国の貧困を肌で実感し学んでいく中で、自国にも貧困があることを知ったからです。ご縁ですね、私が参加したその研修の引率者が林さんでした。

まずは、山谷という街やなぜ相談会ができたのかを少し説明させていただきます。高度経済成長期に日本は公共事業で多くの道路や建物を建てました。今となっては当たり前である高速道路やメトロ、都庁などですが、あれは当時「日雇い」という働き方をしていた人たちが建設会社の下請け会社に雇われ、一つ一つ造りだした労働の結晶です。「日雇い」と言っても今の非正規労働とは違い、「手配師」と呼ばれる仕事を斡旋する人が、欲しい労働力だけ人を集め、車で現場まで送り仕事をさせるというものでした。今では、インターネットを使い派遣会社に登録し、自分の家から仕事場に向かいますが、当時は顔繋ぎであり、仕事に行くのもこの手配師を通じてでなければ現場に行くことができませんでした。日雇いなので日給であり、その日暮らしに近い状態で、住む宿も1泊ずつ払う形態の簡易宿泊所（以下、ドヤ）が利用されていました。そして、手配師が多く集まるところにドヤが建ち、ドヤ街、日雇労働者の街、山谷（東京の場合）ができました。しかし、高度経済成長期も長くは続かず、90年代のバブル崩壊の影響で、多くの労働者たちが仕事と屋根を奪われました。全国各地で野宿生活を強いられた人が増え、最後のセーフティネットである生活保護も受けられず、路上で死んでいく人があとを絶ちませんでした。その頃、隅田川沿いには1,000軒以上の野宿者のテントが張られていましたが、このように暮らしている野宿者の「医療にアクセスしたい」という声を元に、2001年の冬から相談会は始まりました。

○授業で相談会をフィールドとして学んでもらって — 今後の課題 —

このような歴史的な背景がある山谷は、その後20年以上を経て現在は労働者の街というよりは高齢者の街になっています。相談会にもその波は訪れており、当事者は50～70歳の男性が多くなっています。このような高齢の男性が多く集まるなかに10～20代の学生が1年半（授業としては全3回）学びのフィールドとして相談会で一緒に活動してくれ

ました。学期末の学生のエッセイを読むと、「偏見が取れました」「人との繋がり大切さがわかりました」「生活保護の制度が厳しい」など、相談会で小さくも大きな一歩を感じ学んでくれたのだなと思っています。と同時に、半年の授業では、1ヶ月に1回の関わりなので、なかなか深い学びには繋がっていかないなという限界も感じています。私たちから伝えたいと思うこと、学生からわたしたちに聞きたいことがまだまだあるのではないかと思います。当日は慌ただしいなかで活動が行われ、どうしても当事者中心の対応になってしまっています。そして、なにより悲しいことは、名前と顔を覚え、「さあ～、何をこれから一緒にやっっていこうか」と考えた時に、そのときには学生とお別れをしなければならぬということです。そこで、今後の課題として、座学と現場の学びの連携強化、交流会の強化、可能であればゼミのような通年を基本とした授業形態を挙げさせていただきたいと思います。

座学との連携とは、なかなか医療相談会の当日には目にするできない当事者の置かれている環境をフィールドで学び、そこで浮かび上がった疑問を自らの学習につなげるということです。社会のあちこちで起きているしわ寄せが「貧困者」に集中し、「貧困」というだけでさまざまな影響を受けています。社会的に今貧困者が置かれている状況をさまざまな視点から見ること、また「なぜそうなのか」「他の見方はないのか」と疑問をもつことが大切です。全てのものに原因があり、そして過程があります。多くのことに対して根本から疑問を持ち、さまざまな立場に立って想像していくことで新しいことやつかかっているものがクリアに見えてくると思います。まだ柔らかく色んな発想ができる頭で色々なことを想像し考えてほしいと思います。そして、自分の興味のあるテーマについて、その分野の専門家や実際に働いている人の話を聞くことで学びが深まると思います。

交流会の強化とは、相談会のメンバーと学生との関係を深めるということです。相談会に参加している医療従事者や社会人ボランティアと学生との交流をこれまでに2回行いました。小グループを作り、なぜ授業を履修したのか(相談会に参加したいと思ったのか)を訊き、質疑応答の時間を取り、感想や意見の共有をしました。しかし、お互いに一方的に「聞く」「言う」というもので、なかなか双方向的な「コミュニケーションをとる」「ディスカッションする」というところまでいかなかったかなと思います。今後は今まで以上に、どのようにすれば学生とコミュニケーションやディスカッションができるのかを考えていきたいです。また、先にも述べましたが、相談会当日はバタバタしているので、交流会の時間で意見の交換だけではなく、心の交流もできればと思っています。

最後に、通年を基本とした授業形態については先に述べた通りです。月に1回の半年の授業ではなかなか深い学びにまでつながらないと思うので、1年くらいじっくり活動に参加してもらえれば授業形態が望ましいのではないかと思います。

○卒業生として

私は相談会に参加してから本当にリベラルアーツ学群でよかったなと心から思いました。国際協力専攻で多くのことを学び、グローバルな視点で世界をそして日本を見られたかなと思っています。これらの授業は大変興味深く、とても楽しかったです。しかし、労働とはなにか、人間とはなにか、日本の社会保障・社会福祉はどのようになっているのか、今の医療の流れと介護、そして地域のつくり方、社会に相談会の活動を伝えていくときどう表現すればいいのかなど、相談会に参加していく中で国際協力では足りないと思うようになりました。そのため、健福の授業や人類学、社会学、経済学、政治学、メディアの授業など幅広く取り(単位はギリギリですし、大変成績は悪かったのですが)、大変深い学びができた学生生活となりました。大学で学んだことは、今の相談会の活動で生かされています。

また、私がこんなにも色々一生懸命になれたのは、周りにいた友達のおかげでもあります。「昨日まで(バイト)連勤で超大変だよー」はよく学バスで聞くフレーズですね。確かに、そういう友達もいましたし、それはそれで楽しかったのですが、ちゃんと自分の意見をもとにディスカッションができる友達がいたことが何よりも大きかったと思います。特に一緒にフィリピンに行った友達は、分野は違えども問題意識を持っており、授業を通じて多くのことをディスカッションしてきました。そのような友達がそばにいることによって新しい視点や自己表現をする機会を得ることができました。

卒業生としてみなさんに伝えたいことは、「学生」という立場は大変大きな可能性を秘めているということです。「学生」というと、「学割」といった特権しか見えないかもしれませんが、世の中の学生に対するイメージは「学生＝勉強するもの」というものです。勉強嫌いであった私(特に座学は嫌い。そのためAO入試入学。)は、当初このイメージに頭を悩ませたことがありました。しかし、このイメージを逆手に取り、自分の学びたいことをやっている団体に「見学したい」「インターンをしたい」とアプローチしていきました。社会人になってからでは、このように申し出でも団体から受け入れられることは難しく、問題意識を伝え、自分には何ができるのか、どういう思いなのかを細かに説明しなければなりません。何よりもそんな時間も余裕もありません。学生のみなさんにとっては、まさしく「いつやるの?今でしょ!」です。

しかし、学生でも好奇心のみからの行動は受入団体の人たちへの大変な失礼にあたります。仕事であれ、ボランティアであれ、社会を今よりもっと良くしたいと思って活動している人たちの中には、それなりの思いや覚悟があってやっている人が多いです。自分のフィールドではないことを理解し、受入先の人の思いを汲んで敬意を払いながら良い関係を作ること、学んでいくことが大切だと思います。しかし、勘違いしてはいけないのは

「敬意をはらう＝意見を言わない。ベタ褒めする。」ということではありません。受入団体側としては、色々興味を持って質問してくれた方がうれしいです。良い関係を作れば色々なことを教えてくれると思います。

最後に、今まで書いてきたことを本当は学生の時の自分に言ってやりたいのですが、もう遅いので後輩のみなさんに次ぎます。OBRINER!! BE AMBITIOUS!!

5. サービス・ラーニングの授業づくりへの提言

以上では、学生の学びと受入団体からの声を取り上げたが、本項ではこれらを踏まえ、「学而事人」を目指した今後のサービス・ラーニングの授業づくりへの提言として以下三つを挙げたい。

ひとつは、学生が現場で自ら発見した疑問に基づき、自主的な学習をしていくことができるように支援していく授業づくりである。4. (3)では、受入担当者が「なかなか深い学びには繋がっていかないなという限界も感じています。」と述べていた。これは、学生がサービス・ラーニングの学びで得たものを自主的な学習につなげていく力が弱いことを指摘している。これまで「わたしたちに身近な貧困」の授業づくりでは、意見交換やワークショップといった参加型の学習方法を取り入れながらも、基本的には教員が学生に知っておいてほしい知識あるいは現場で必要となる知識について講義をし、そこから学生が現場での体験とつなげ何を考えるのか、それを他者にどう表現するのかに重点を置いてきた。それは講義で聞いた知識が現場で実感を伴って理解できるようにすることを目的としていたのであり、学生が自ら考える機会をつくることを意図していたからであった。しかしながら、サービス・ラーニングが学生の市民としての責任や学生の主体的な学びを育成することを目的としているのであれば、また本学におけるサービス・ラーニングが「学而事人」を目指しているのであれば、受入団体からの提言に見られたように、学生が現場で葛藤し、疑問を持ち帰ってきていることにもっと目を向け、学生一人ひとりが現場で感じた疑問を解消するための自主的な学習を支援していく仕組みを授業のなかでつくっていく必要があるだろう。そのためには、教員は学生一人ひとりのモチベーションを支え、また学生の「活動記録」等から彼らが何を感じ、考えているのかを丁寧に読み取り理解すると同時に、学習の仕方について個別に指導をしていく必要がある。

ふたつ目は、学生一人ひとりが自分事として組織における責任・役割を担っていくような授業づくりである。上記2. に見たように、サービス・ラーニングではコミュニティと学生の双方が恩恵を受ける者として明確に位置付けられていた。そして、本学の教育方針

である「学而事人」は、学生がこのような責任・役割を担ってこそ、達成されうるものである。教員は、学生たちにただ体験現場・学習現場を提供するのではなく、彼らができることに限界があることは認めつつも、彼らがいかにその現場に責任をもって関わり、貢献することができるのかについて真摯に考え、学生に働きかけていく必要があるだろう。また、教員は、受入れ団体に対しては、学生を単なる労働力ではなく、団体の未熟な、しかし将来的には未知の可能性を有した一員として受け入れてくれるように理解を求め、双方が恩恵を受けられるような関係を築いていく必要がある。

しかし、そのためには、三つ目として学生が受入団体で活動する時間を一定程度以上確保する必要がある。現状では半期の授業で30時間程度の活動となっているが、期間にするにたったの3ヶ月である。このような短期間では、現場や受入団体の理解、現場で出会う他者との関係づくりは深まらず、また4. (3)で担当者が述べるように、ともに何ができるかを考え、それを実行するには時間が足りない。もちろんこのような短期間でも学生の学びはあるのではあるが、コミュニティと学生の双方が恩恵を受けるサービス・ラーニングを実践していくためには、また「学而事人」を具現化し、学生の市民としての責任や主体的な学びを育成していくためには、より長期的な現場との関わりが不可欠である。

6. おわりに

本稿では、サービス・ラーニング科目である「わたしたちに身近な貧困」を取り上げ、これまでの実践を受入団体の声と学生の学びの視点から振り返った。ここからは、学生には現場での体験を通して自ら発見した疑問に基づき、自主的な学習を進めていく力が弱いこと、また現状の授業づくりがそれを支えられていないこと、そしてフィールドでの活動に際して、団体のメンバーと良い関係性を築いていくことや団体に貢献していこうとする気持ちが学生のなかにさほど育っていないことが課題として浮かび上がった。そこで、今後これらの課題を克服し、本学において「学而事人」を目指したサービス・ラーニングを実践していくために、以下三つの提言を行った。

ひとつは、学生が現場で自ら発見した疑問に基づき、自主的な学習をしていくことができるようにするために、教員は学生が現場で何を感じ、考えているのかを丁寧に把握しながら個別の指導を行っていくことであり、ふたつめは、団体活動における一人ひとりの責任と役割を考えさせるような学生への積極的な働きかけと大学と受入団体との良好な関係性の構築である。しかしながら、これを達成するためには、学生の現場におけるより長期的な関わり確保が不可欠であることが三つめとして挙げられる。

今回の三つの提言は、あくまでも既存の講義をベースとして、そこに意見交換やワークショップといった参加型の手法を取り入れた授業に対する提言となるわけであるが、昨今大学教育においても体験学習やアクティブラーニングの取り組みが注目されるなか、今後このような既存の講義をベースとして参加型の手法を取り入れる授業づくりは増えると思われる。しかしながら、本稿での考察は、学生の主体的な学び、能動的学修を引き出し、市民としての責任を育成していくためには、このような授業づくりの試みだけではその達成は難しく、根本から授業づくりの考え方や方法を変える必要があることを示唆している。

なお、今回は筆者の試行錯誤の実践を振り返り、そこから見える課題を抽出するのみに留まってしまい、今後の授業づくりにおける根本的な考え方や方法の変化を考察するまでには至らなかった。今後は他の実践も参考にしながら研究を重ね、本学におけるより良いサービス・ラーニングの実践に微力ながら貢献していきたい。

謝辞

今回寄稿していただいた受入担当者である山口咲さんには、仕事、相談会の活動と非常にお忙しいなか、一メンバーとして、また卒業生として率直な意見をまとめていただき、心より感謝しております。また、平素より本学の学生を一メンバーとして温かく迎え入れてくれている隅田川医療相談会のみなさまにも、この場を借りて感謝申し上げます。

引用・参考文献

唐木清志 (2010)『アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング』東信堂、30-31 頁。

桜井政成 (2007)「地域活性化ボランティア教育の進化と発展：サービス・ラーニングの全学的展開を目指して」『立命館高等教育研究』第7号、23-24 頁。

嶺井明子 (2007)『世界のシティズンシップ教育—グローバル時代の国民／市民形成』東信堂、4-9 頁。

土橋敏良 (2011)「臨床教育プログラムとしてのサービス・ラーニングの展開—キリスト教精神の浸透と具現化を求めて—」『OBIRIN TODAY』11号、149-164 頁。

注

1 アメリカの連邦機関である CNCS (Corporation for National and Community Service) のサイト http://www.nationalservice.gov/pdf/cncs_statute.pdf を参照 (2013年9月17日閲覧)。

2 学生がボランティア活動を通して自己肯定感を高めるといった効果は認められるが、ここではアカデミックな教育活動に注目しているためこのような効果については考察の対象としない。

- 3 但し、基盤教育院フィールド教育デパートメントでは2007年から「地域社会参加」の科目を開講しており、当時はサービス・ラーニングということばを使用してはいなかったものの、実質的にはサービス・ラーニングを趣旨とした授業づくりを行っていた。
- 4 第1回(2011年7月27日) SLC企画委員会の配付資料より。